

2011年3月11日午後2時46分、青森市内は地震とともに停電。翌日からガソリンスタンドでの給油が困難となった。

被災地では、受け入れ準備ができていないのでボランティアはまだ遠慮してほしいと言っている。ならば、今できることは募金しかないのでは…。大規模災害の発生直後は、ボランティアセンターが立ち上がらないとボランティアたちはなかなか活動できないのが現実だが、もたもたしているとボランティア熱は冷めてしまう。

東日本大震災の被災地に私が最初に入ったのは1カ月余り後の4月16日、岩手県陸前高田市である。被災地の必要物資は時間とともに変化する。生活のほとんどが津波で流されたのに、被災者からリクエストされたものの多くは入手困難だった。水を運ぶポリタンクや車3乾電池などなど。驚いたのは爪切り。被災者から言われないと、誰も気が付かなかったかも。私は仕事柄、非常用物資などの備蓄にはもともと気を配っているが、東日本大震災を

本県の防災意識も心配



被災地の復興ボランティア活動のため宮城県の仮設住宅を訪ね、県防災士会が集めた義援金を手渡す筆者（写真中央）＝2012年3月

教訓に、非常用の装備と備蓄をかなり増やすことにした。装備ではカセットボンベ使用の発電機とガスストーブ、丸型の石油ストーブ。備蓄はガソリンの缶詰と、保存食料を3日分から1週間分に、ペットボトル飲料水はダンボールで1箱から3箱に増やした。このほかにも気が付けば随時買い求めている。

大震災直後の買い占め、買いだめは、一般の住民が困るだけではなく、被災地や救助隊へ必要なものが届かないという深刻な事態を招いたことを忘れないでほしい。それを防ぐため、日ごろから各家庭で最低3日分の備蓄をお願いしたい。さて、今年は台風1号が史上2番目に遅く発生、8月か

ら9月にかけては年間平均上陸数の約2倍となる5個の台風が相次いで本土に上陸し、岩手県や北海道に甚大な土砂災害・水害をもたらした。原因は想定外の大雨だ。気象庁は異常気象の原因にエルニーニョ現象を取り上げている。これは地球温暖化と思っ昇すると、台風は発達したまま北上するし、空気中の水蒸気も増えている。何よりも、二酸化炭素が増えて「地球が怒っている」と思う次第だ。さて、避難勧告・避難指示の発令権限が市町村長に付与されてから50年以上になるが、いまだに周知や理解が進んでいないようだ。

今回の台風被害に関する一連の報道によると、一般住民のみならず市町村のトップや介護施設の責任者までもが、「避難準備情報」の意味を理解していなかったという。理解が浸透していないことを深刻に受け止めて、災害の教訓としてぜひ生かしてほしい。

今月のお題 災害からの教訓

各避難情報発令時、住民に求められる行動	
避難準備情報	<ul style="list-style-type: none"> 要援護者等、特に避難行動に時間を要するものは、計画された避難場所への避難行動を開始
避難勧告	<ul style="list-style-type: none"> 通常の避難行動ができる者は、計画された避難場所等への避難行動を開始
避難指示	<ul style="list-style-type: none"> 避難勧告等の発令後で避難中の住民は、確実な避難行動を直ちに完了 まだ避難していない対象住民は、直ちに避難行動に移るとともに、そのいとまがない場合は生命を守る最低限の行動

中央防災会議「災害時の避難に関する専門調査会」資料より

自主防災組織率全国ワースト2位がずっと続いているわが青森県や、県内40市町村のトップの防災意識は向上しているのだろうか、と心配せずにはいられない。
(工藤淳、気象予報士・防災士、アップルウェザー社長、青森市在住)
※第3週に掲載します。